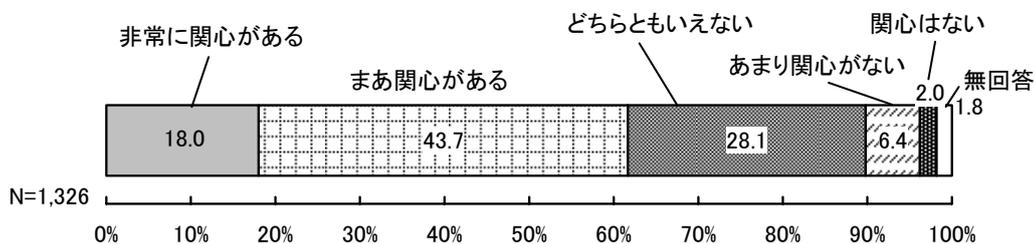


## ◇障害者福祉について

問 15 あなたは、身体や心に障害のある人たちに対して関心をお持ちですか。(○は1つ)

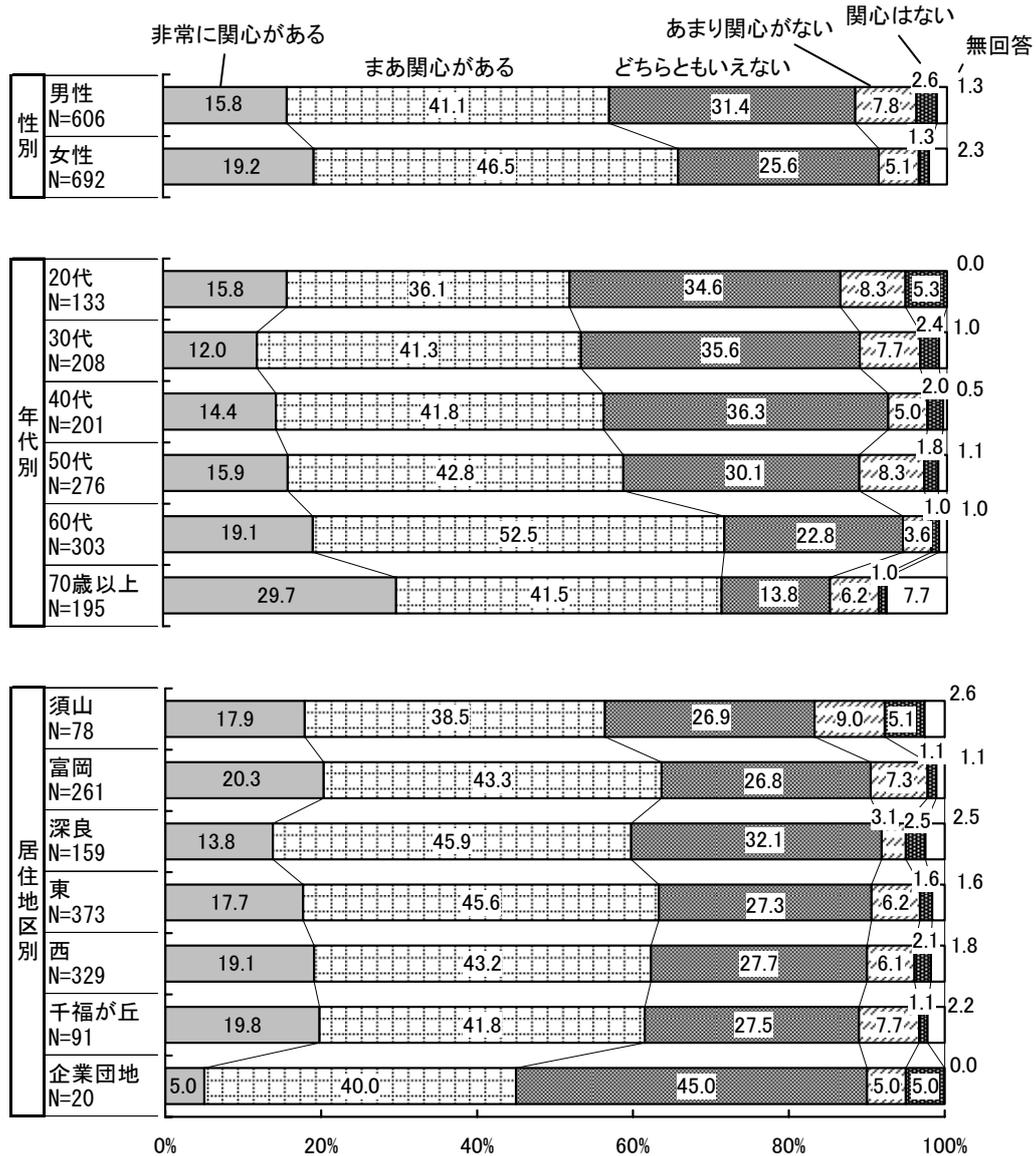


心身に障害のある人たちに対する関心は、“関心がある”割合が6割強。

“関心がある”割合は、男性より女性が高く、また年代が上がるほど高い。

心身に障害のある人たちに対する関心は、「非常に興味がある」が18.0%、「まあ興味がある」が43.7%となっており、合わせて“関心がある”は61.7%と大半となっている。一方、「あまり興味がない」が6.4%、「関心はない」が2.0%となっており、合わせて“関心がない”は8.4%と1割に満たない。

【属性別】

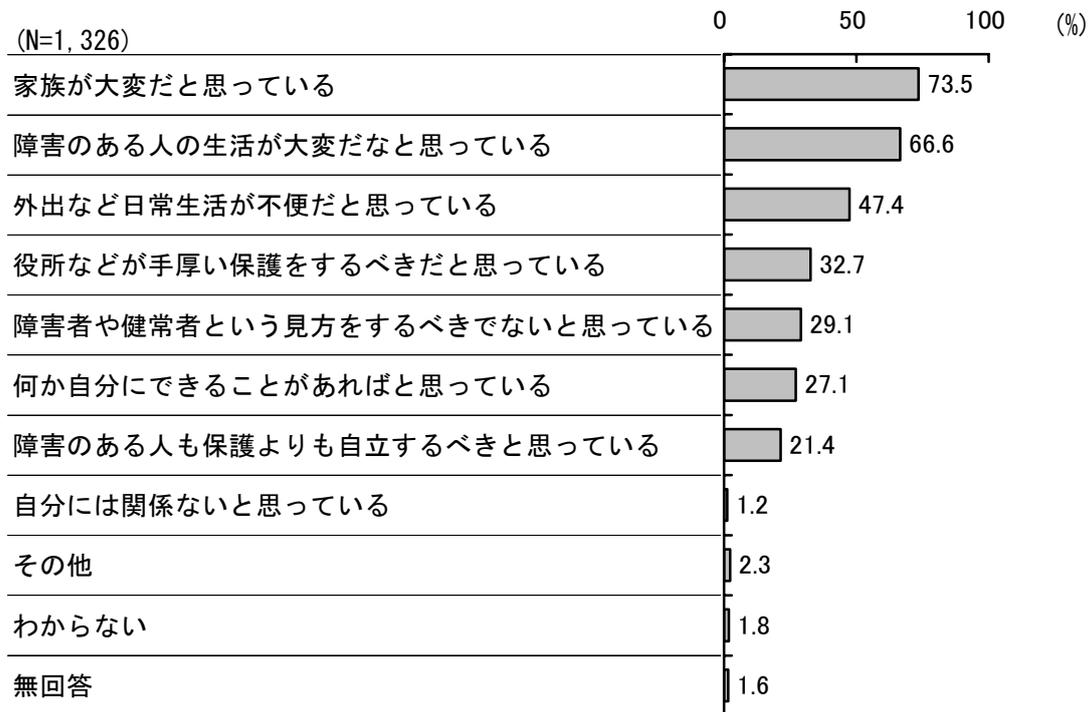


性別にみると、「非常に興味がある」、「まあ興味がある」とも女性が男性を上回り、「関心がある」割合は、男女の差が大きくなっている。男性では「関心がない」割合が1割を超える。

年代別にみると、「関心がある」割合は年代が上がるほど高い傾向である。「関心がない」割合は20代、30代と50代で1割を超えている。

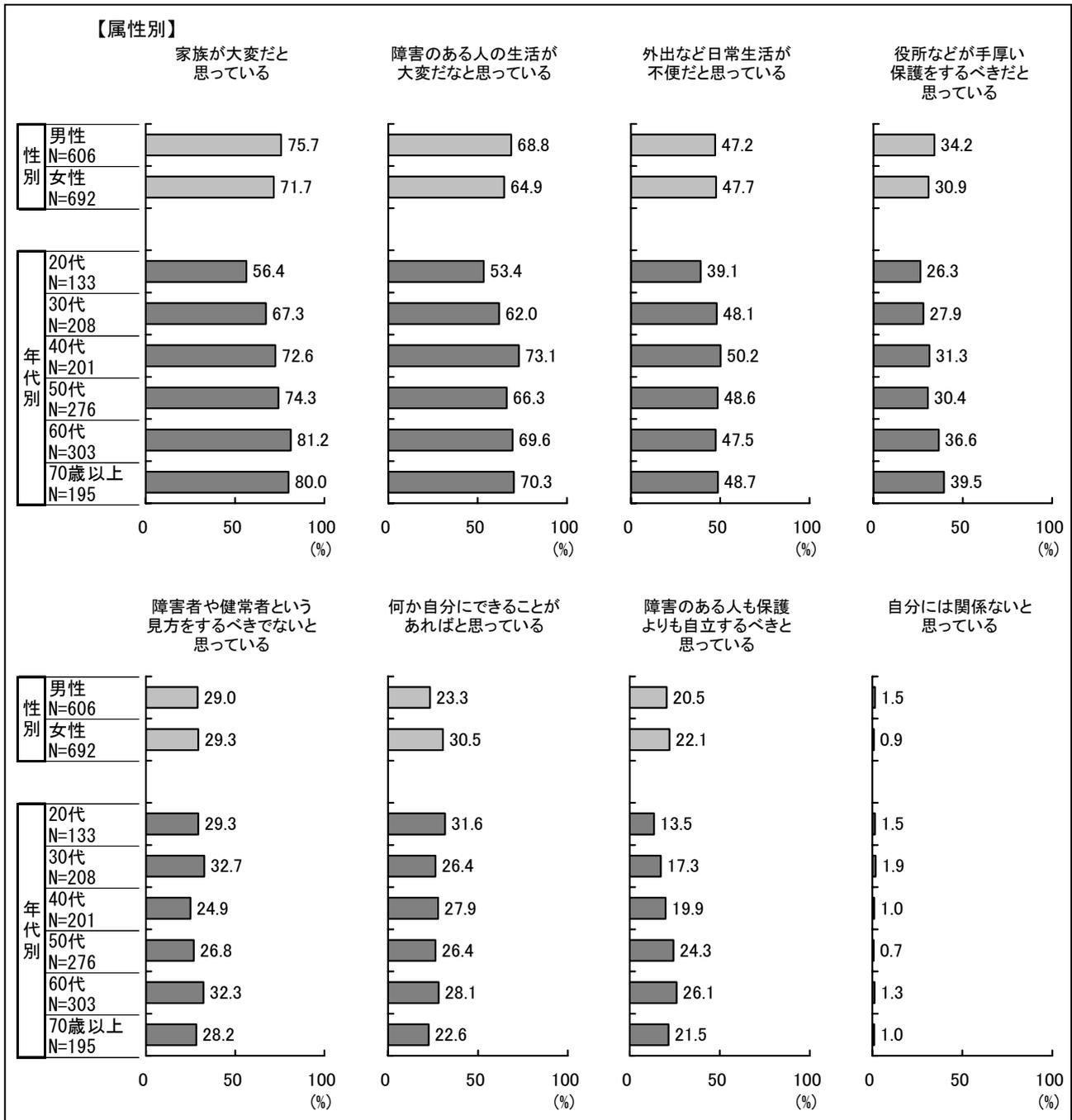
居住地区別にみると、「関心がある」割合は、富岡、東、西、千福が丘の4地区では6割を超えている。反面、「関心がない」割合も1割弱と比較的高くなっている。須山、企業団地の2地区では「関心がない」割合が1割以上となっている。

問 16 貴方は日常的に身体や心に障害のある人たちに対してどのような意識をお持ちですか。(〇はあてはまるものすべて)



日常的に心身に障害を持つ人に対して持っている意識は、「家族が大変だと思っている」が7割強と最も高い。

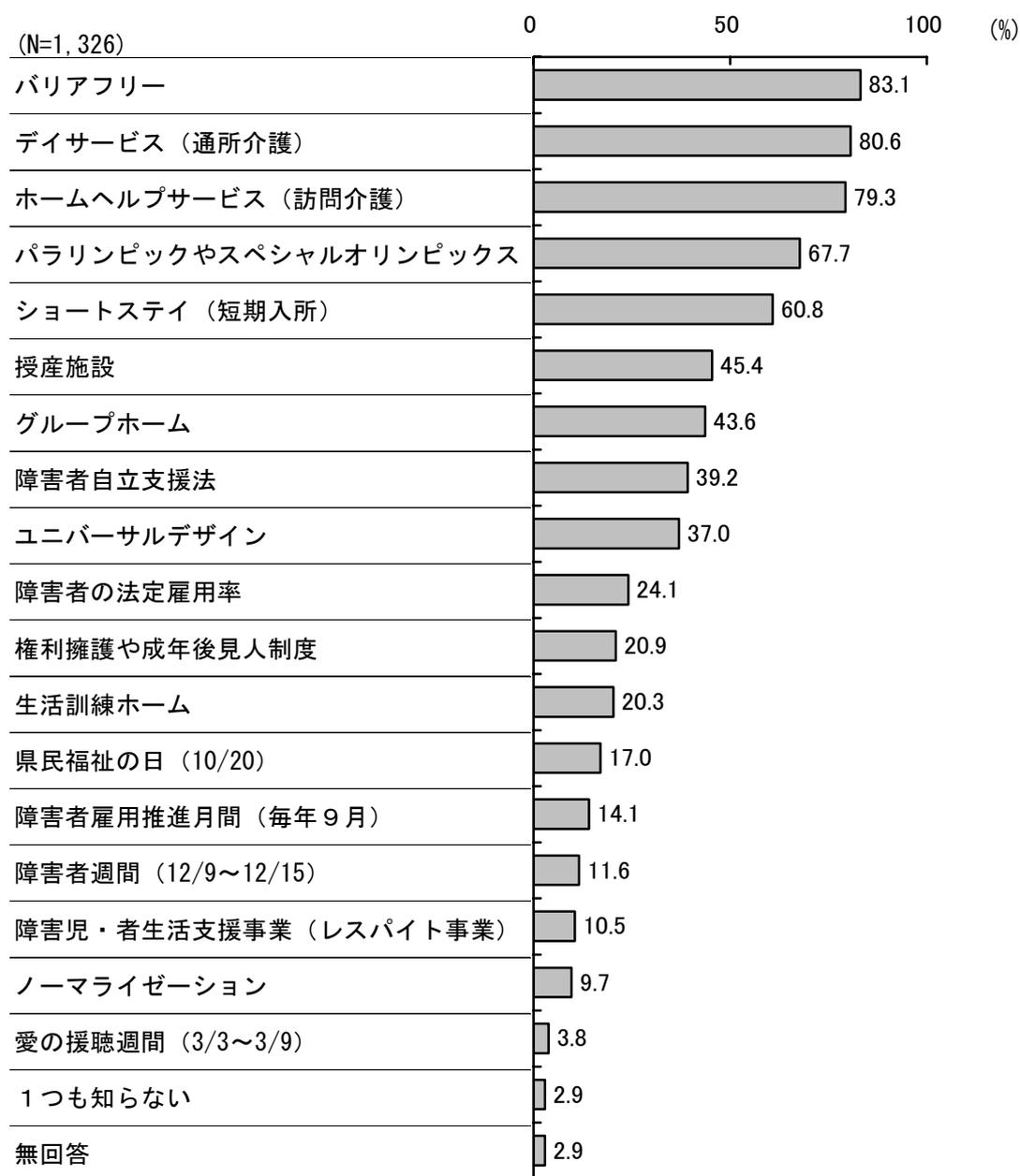
日常的に心身に障害を持つ人に対して持っている意識は、「家族が大変だと思っている」が73.5%と最も高く、次いで「障害のある人の生活が大変だなと思っている」が66.6%、「外出など日常生活が不便だと思っている」が47.4%、「役所などが手厚い保護をするべきだと思っている」が32.7%となっている。



性別にみると、ほとんどの項目で大差は見られないが、「何か自分にできることがあればと思っている」は女性が男性よりやや高い。

年代別にみると、「家族が大変だと思っている」、「障害のある人の生活が大変だと思っている」、「役所などが手厚い保護をするべきだと思っている」、「障害のある人も保護よりも自立すべきだと思っている」などは年代が上がるほど割合が高くなる傾向となっている。

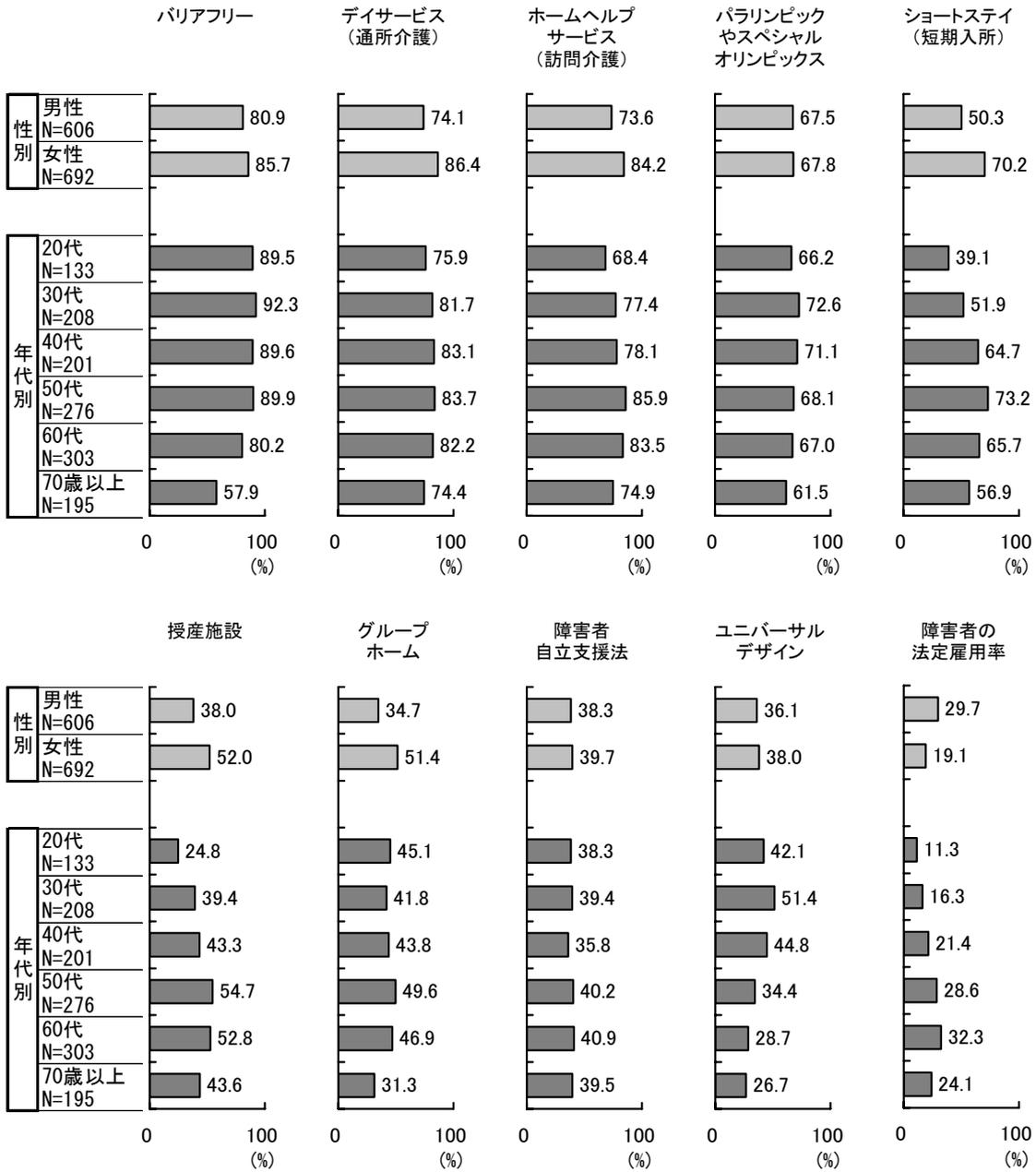
問 17 あなたは、次にあげる言葉などをご存知ですか。(〇はあてはまるものすべて)

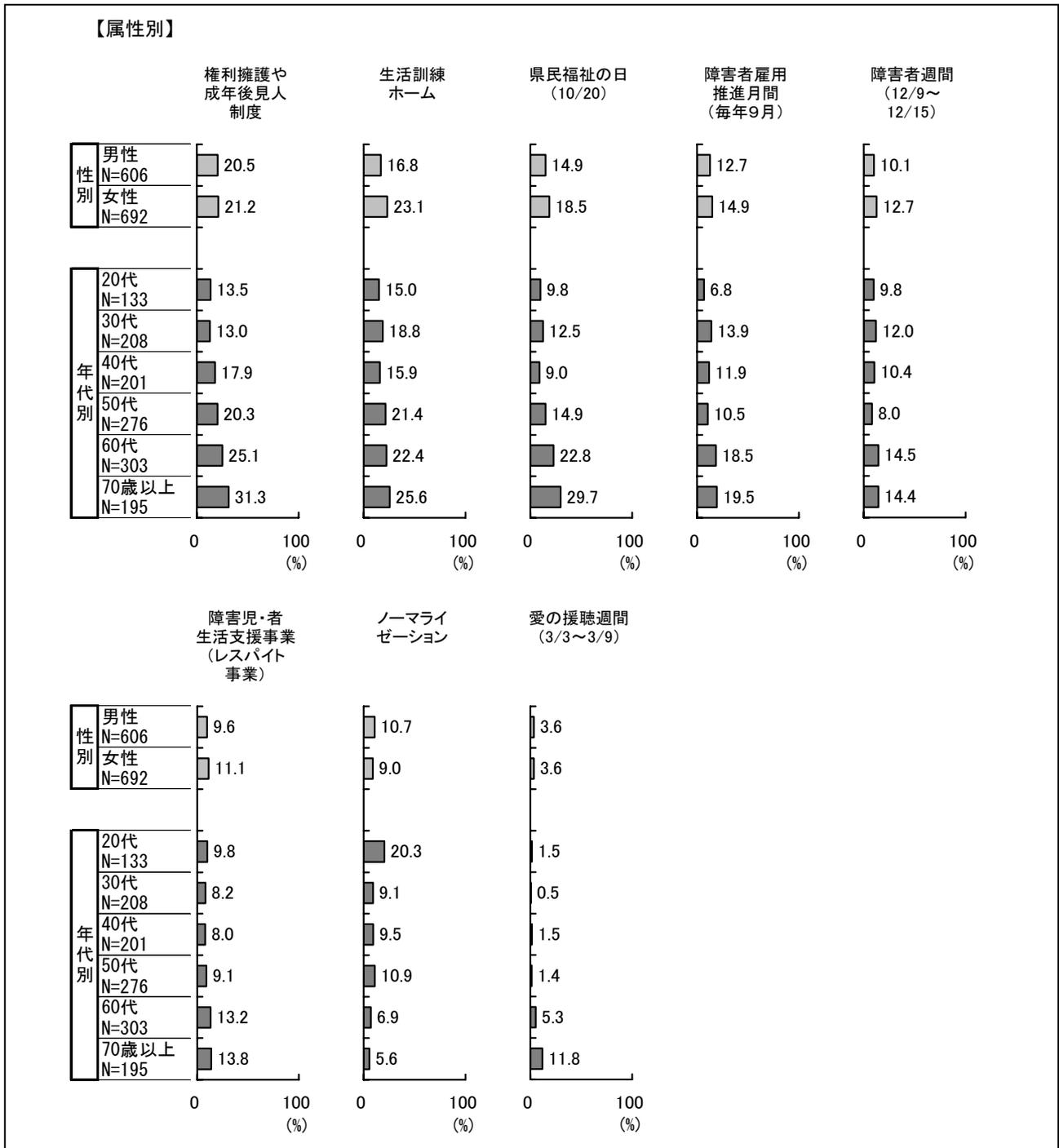


福祉に関する言葉の認知度は、上位3項目が8割前後。高齢者福祉にも関わる言葉の認知度は高いが、障害者福祉に関する言葉の認知度は多くが半数に満たない。認知度はほぼすべての項目で男性より女性が高く、年代が上がるほど高い。

福祉に関する言葉の認知は、「バリアフリー」が83.1%と最も高く、次いで「デイサービス (通所介護)」が80.6%、「ホームヘルプサービス (訪問介護)」が79.3%とこの3項目は8割程度となっている。以下「パラリンピックやスペシャルオリンピックス」(67.7%)、「ショートステイ (短期入所)」(60.8%)となっており、高齢者福祉にも関わる言葉の認知度は高いものの、障害者福祉に関する言葉の認知度は多くが半数に満たない。

【属性別】

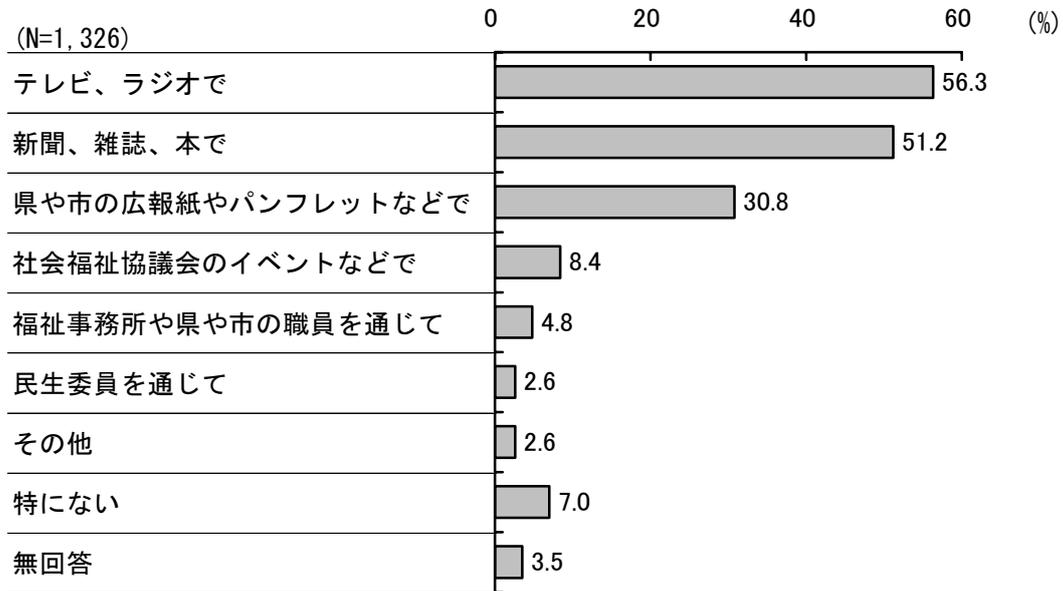




性別にみると、ほぼすべての項目で女性が男性を上回っている。特に「ショートステイ（短期入所）」は、約 20 ポイントの差が開いている。また、「デイサービス（通所介護）」や「ホームヘルプサービス（訪問介護）」でも 10 ポイント以上の差がある。一方、「障害者の法定雇用率」と「ノーマライゼーション」は男性が女性を上回り、特に「障害者の法定雇用率」は 10 ポイント以上の差をつけて高い。

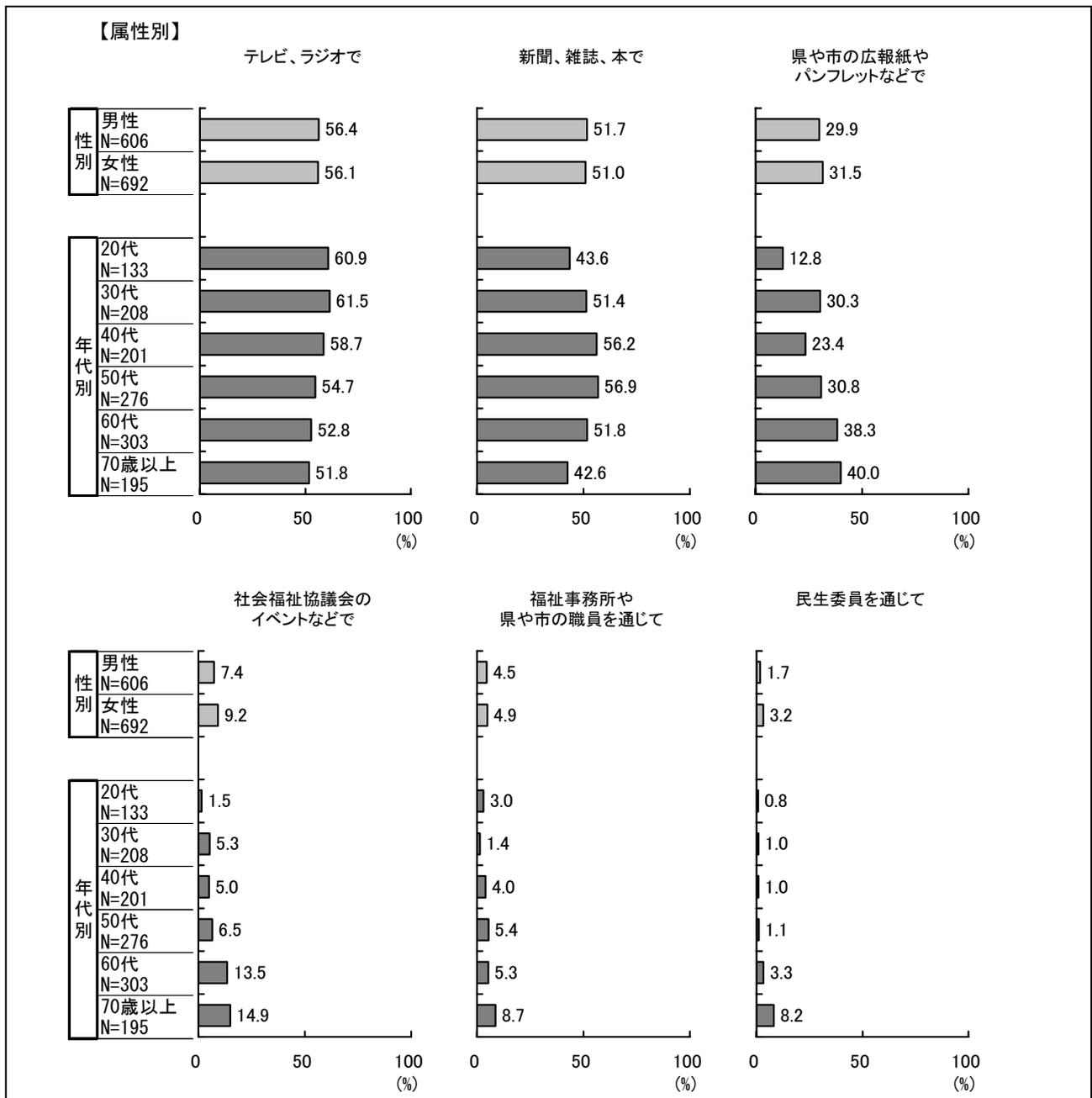
年代別にみると、ほぼすべての項目で年代が上がるほど割合も高くなる傾向となっている。特に「ショートステイ（短期入所）」、「授産施設」、「権利擁護や成年後見人制度」、「生活訓練ホーム」、「県民福祉の日」などでその傾向が強い。一方、「ユニバーサルデザイン」は年代が低いほど割合が高い傾向となっており、最も高いのは 30 代で半数を超えている。また、「ノーマライゼーション」は 20 代においてのみ 2 割を超えており、ほかの年代に比べ目立って高い。

問 18 あなたは、福祉に関する制度や動きについての情報を、どのような手段で得ることが多いですか。(〇は主なもの2つまで)



福祉に関する制度や動きについての情報を取得する手段は、「テレビ、ラジオ」、「新聞、雑誌、本」、「県や市の広報紙やパンフレットなど」の3項目が主な手段と考えられる。

福祉に関する制度や動きについての情報を取得する手段は、「テレビ、ラジオで」が 56.3%、「新聞、雑誌、本で」が 51.2%と過半数となっており、次いで「県や市の広報紙やパンフレットなどで」が 30.8%となっており、この3項目が主な手段となっていると考えられる。



性別にみると、大差は見られない。

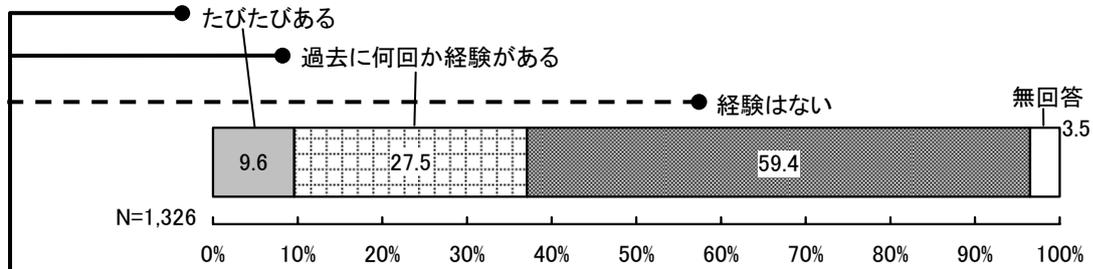
年代別にみると、主な情報取得手段として考えられる3つの項目のうち、「テレビ、ラジオで」は年代が低いほど割合が高く、「新聞、雑誌、本で」は30代～60代で過半数となっている。「県や市の広報紙やパンフレットなどで」はおおむね年代が上がるほど割合も高くなっているが、30代でも3割となっている。また、「社会福祉協議会のイベントなどで」、「福祉事務所や県や市の職員を通じて」、「民生委員を通じて」の3つは、年代が上がるほど割合も高くなる傾向となっている。

問 19 あなたは障害のある人といっしょに活動した経験をお持ちですか。(○は1つ)

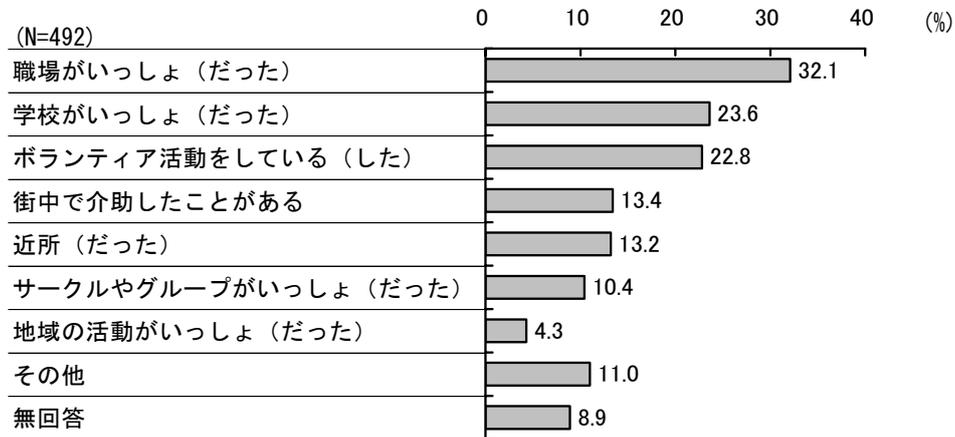
問 19-1 主にどのような場面でいっしょに活動されましたか。(○はあてはまるものすべて)

問 19-2 その場合、介助にはどのような印象を持たれましたか。(○は1つ)

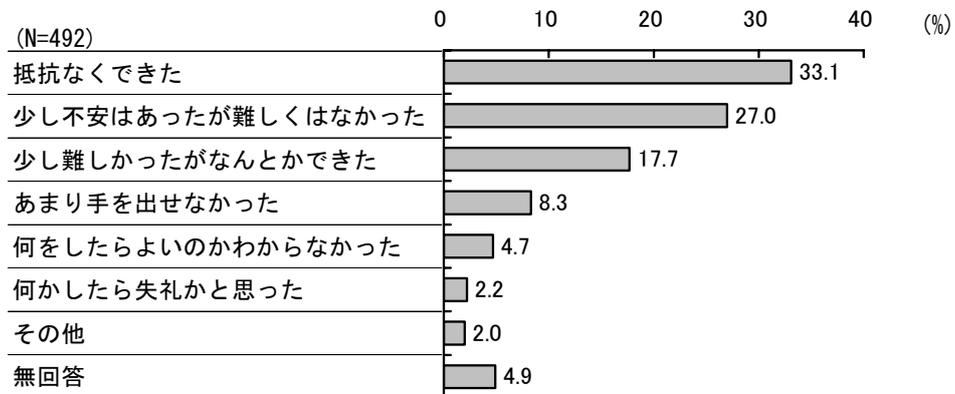
問 19-3 経験がないのはどのような理由ですか。(○はあてはまるものすべて)



◆活動した場面

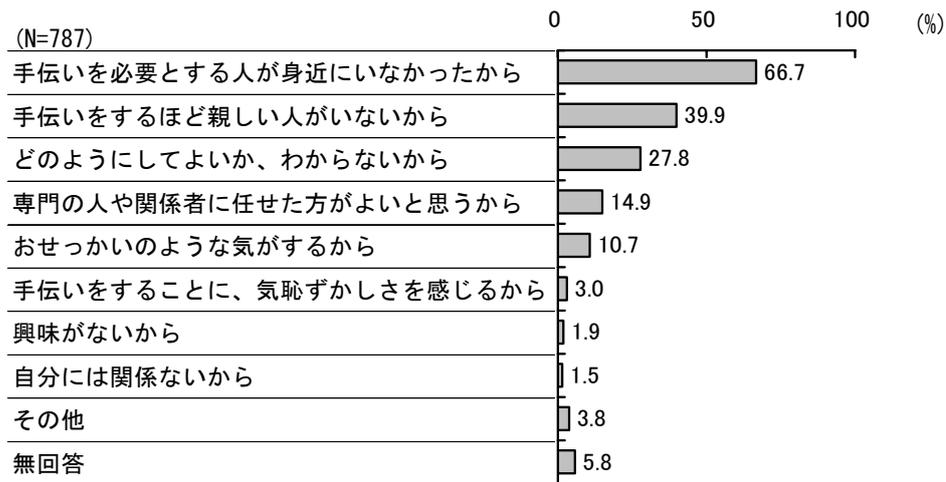


◆介助の印象



次項へ

◆ 経験のない理由



障害のある人といっしょに活動した経験は「ない」が約6割。活動の場面は「職場」や「学校」。介助に対する抵抗感は比較的少ないとみられる。活動経験のない理由は、“障害のある人を身近に感じられない”のが大きな理由とみられる。

障害のある人といっしょに活動した経験は、「経験はない」が 59.4%と約6割で、頻度に関わらず経験のある人は半数に満たない。

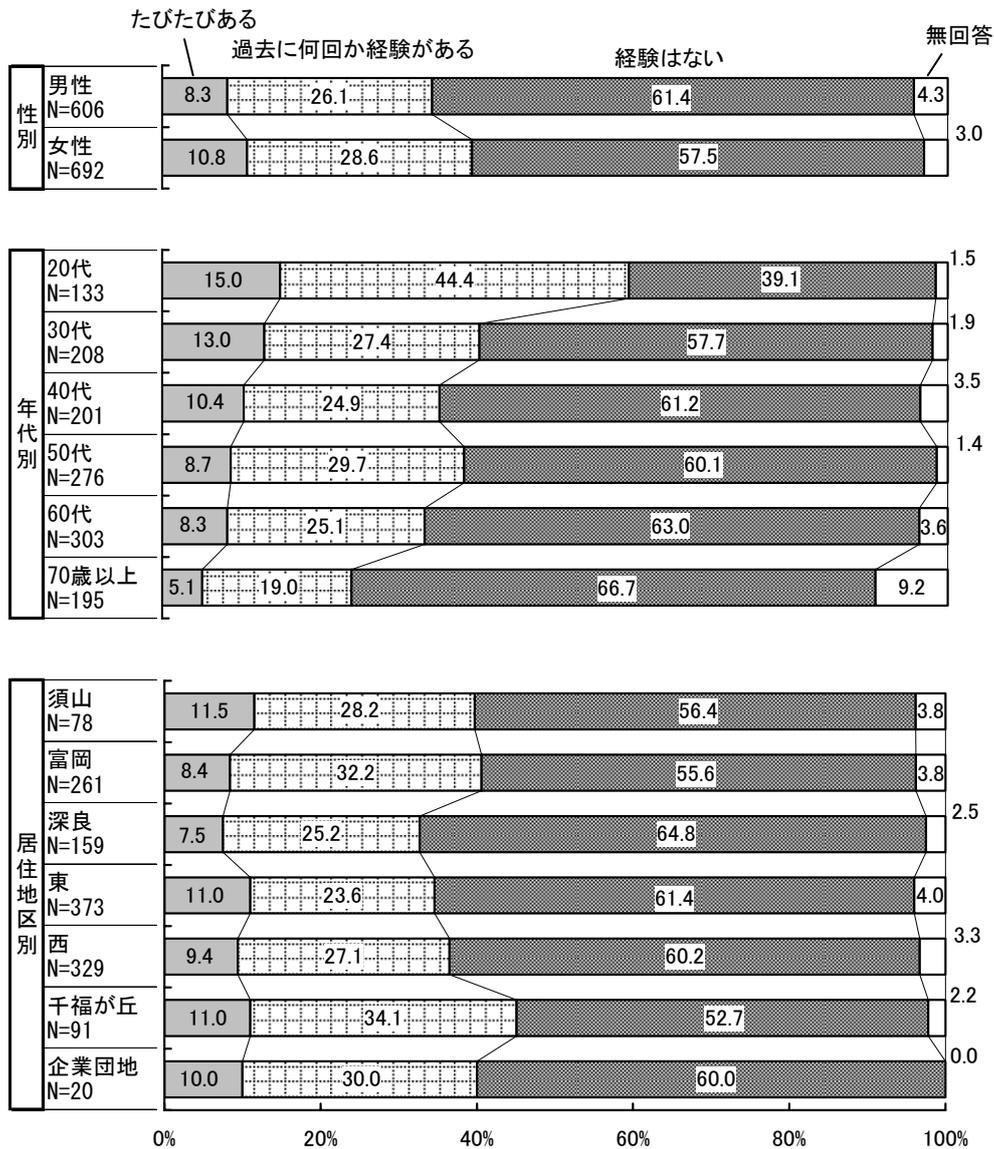
「たびたびある」あるいは「過去に何回か経験がある」人の活動の状況をみると、活動した場面は、「職場がいっしょ（だった）」が 32.1%と最も高く、次いで「学校がいっしょ（だった）」が 23.6%、「ボランティア活動をしている（した）」が 22.8%となっている。

活動時の介助の印象は、「抵抗なくできた」が 33.1%、「少し不安はあったが難しくはなかった」が 27.0%と介助に対する抵抗感は比較的少ないものとみられる。

障害のある人といっしょに活動した経験のない人に理由を聞いてみると、「手伝いを必要とする人が身近にいなかったから」が 66.7%と大半で、次いで「手伝いをするほど親しい人がいないから」が 39.9%となっており、“障害のある人を身近に感じられない”のが大きな理由とみられる。

【属性別】

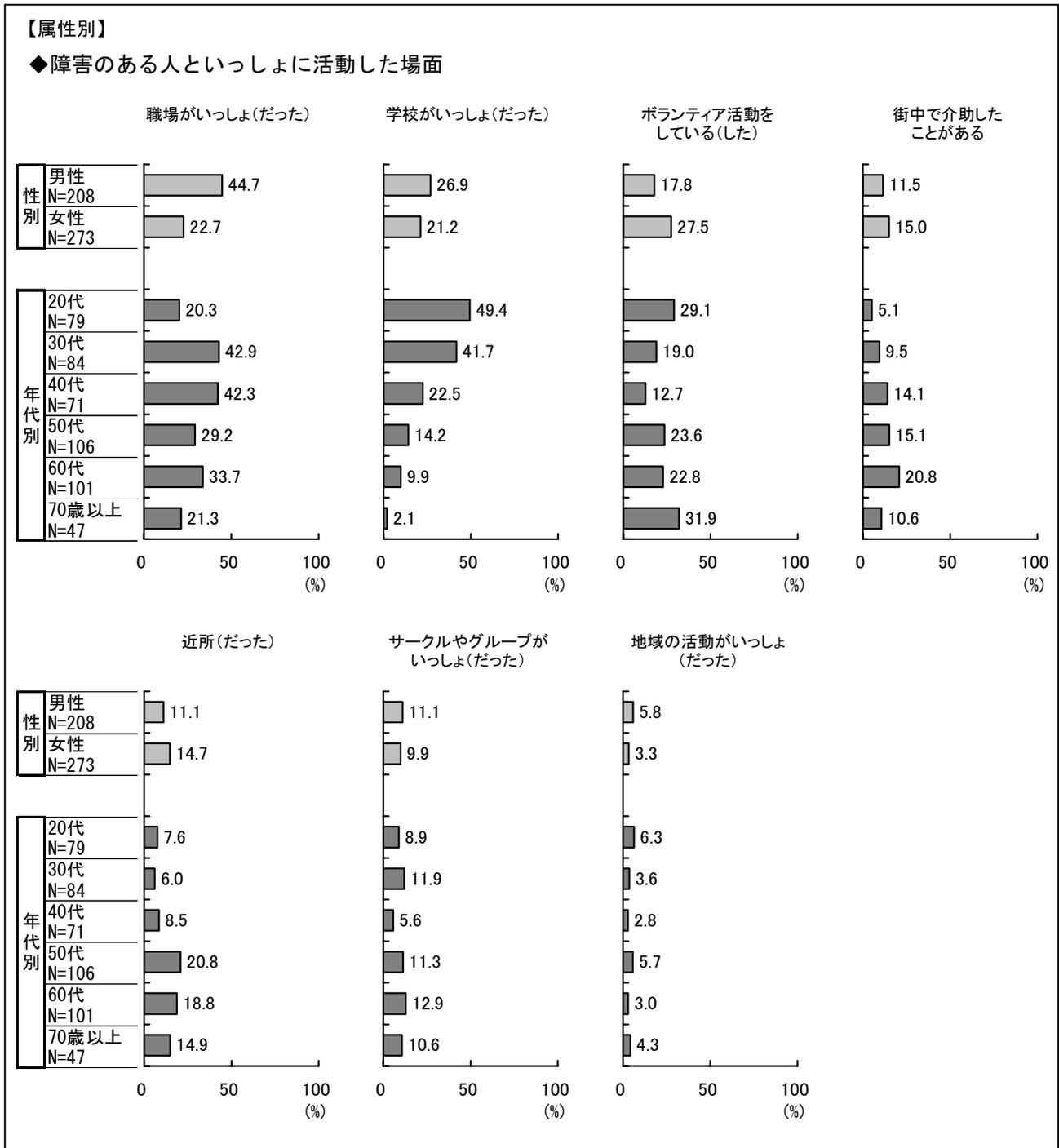
◆障害のある人との活動経験



性別にみると、性別にかかわらず「経験はない」が6割前後となっているが、経験のある割合は女性が男性を上回っている。

年代別にみると、「たびたびある」は年代が上がるほど割合が低くなっている。経験のある割合も同様の傾向で、これは年齢的、健康的な問題もあると思われる。20代でのみ「経験はない」が4割を下回り、経験のある割合が過半数となっている。

居住地区別にみると、富岡、深良の2地区を除いて「たびたびある」は1割前後となっている。経験のある割合は、千福が丘で最も高く、深良で最も低い。「経験はない」はすべての地区で過半数となっているが、千福が丘はやや低くなっている。

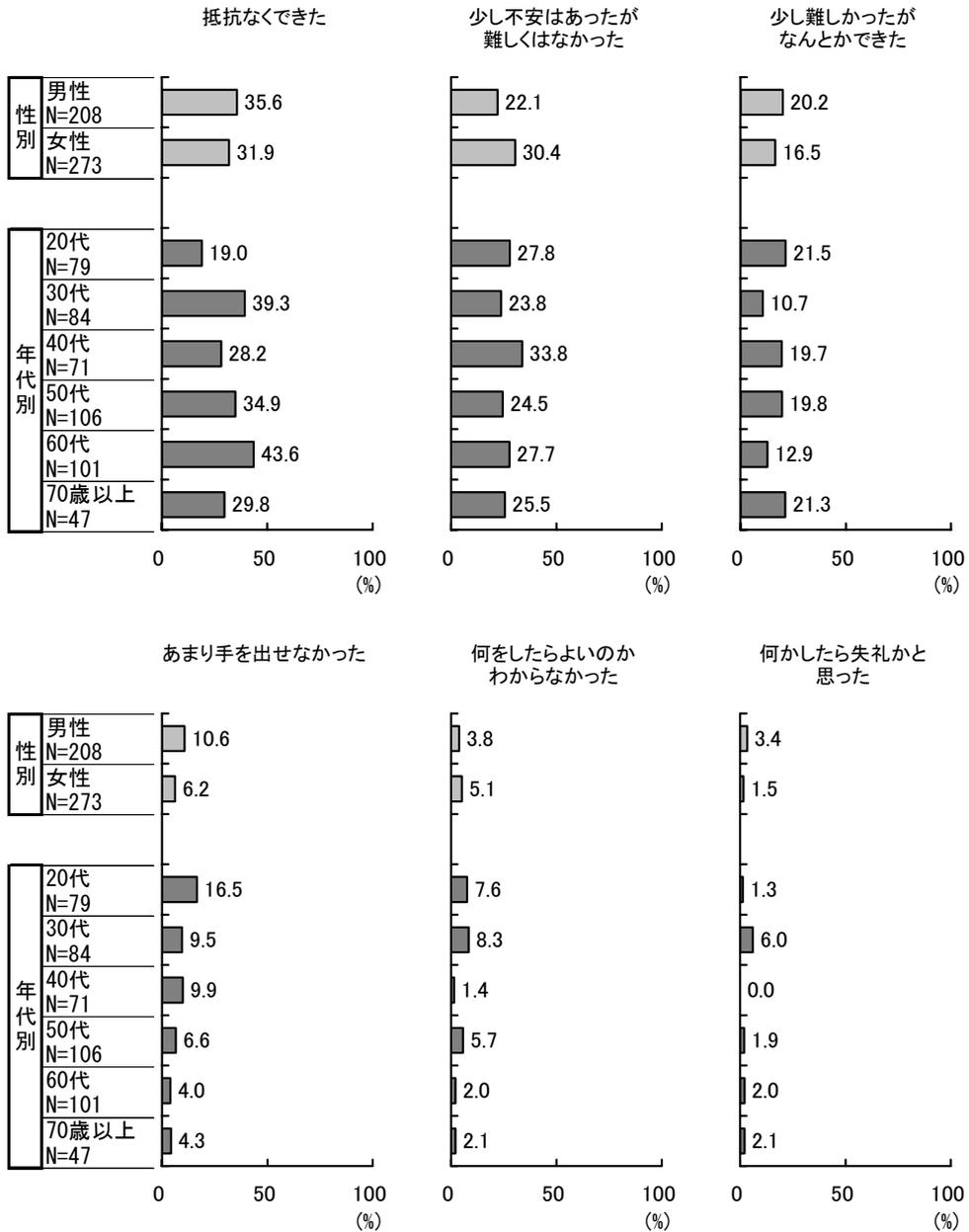


障害のある人と一緒に活動した場面を性別にみると、「職場がいっしょ(だった)」は男性が女性を大きく上回り、「ボランティア活動をしている(した)」は女性が男性を大きく上回っている。

年代別にみると、「職場がいっしょ(だった)」は30代、40代で最も高くなっている。「学校がいっしょ(だった)」は年代が上がるほど割合は低くなっている。「ボランティア活動をしている(した)」は40代まで年代が上がるほど低くなり、50代以上は高くなっている。

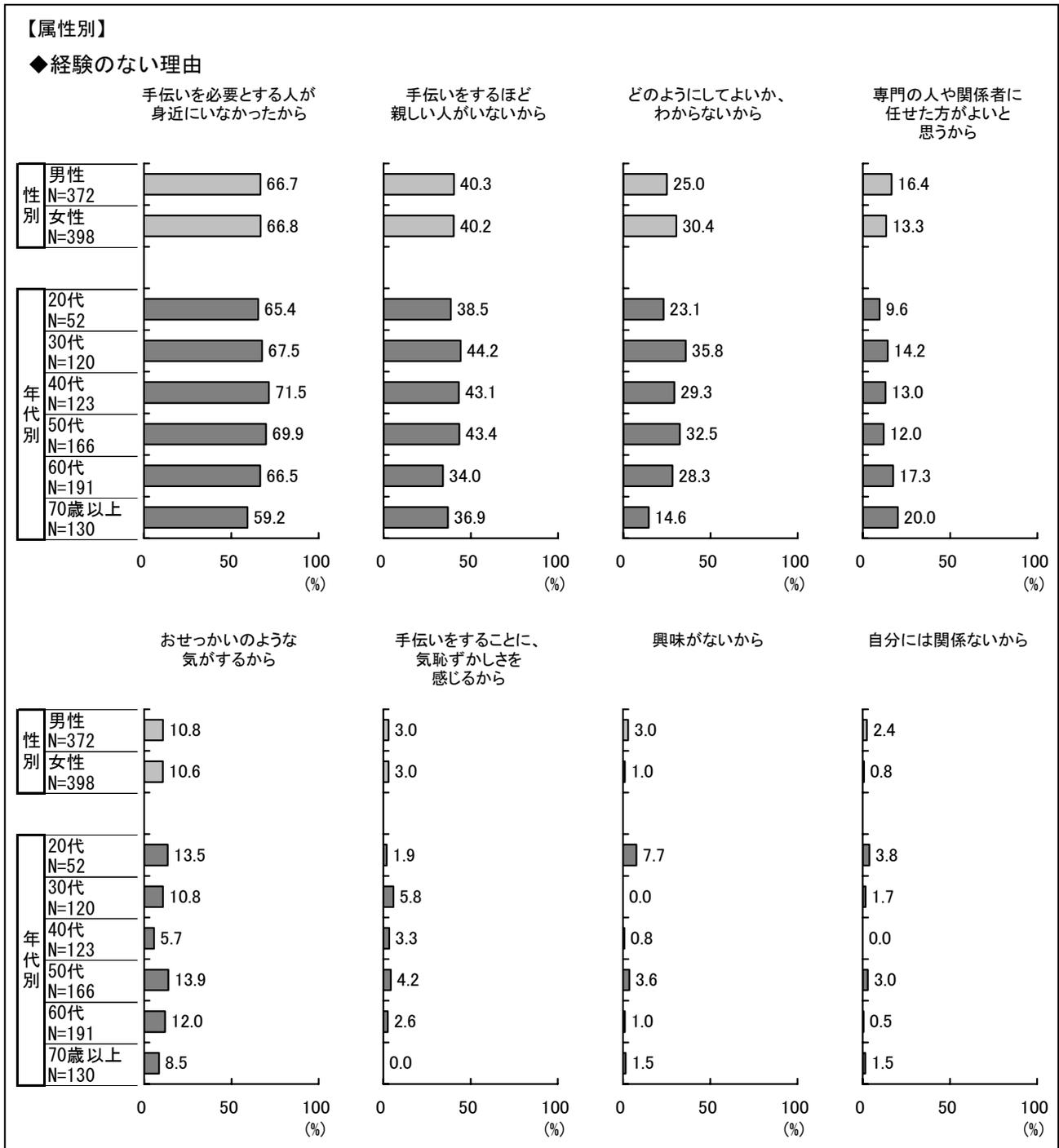
【属性別】

◆介助の印象



介助の印象を性別にみると、大差は見られないが、「少し不安はあったが難しくはなかった」は女性が男性をやや上回っている。「あまり手を出せなかった」は男性が女性をわずかに上回っている。

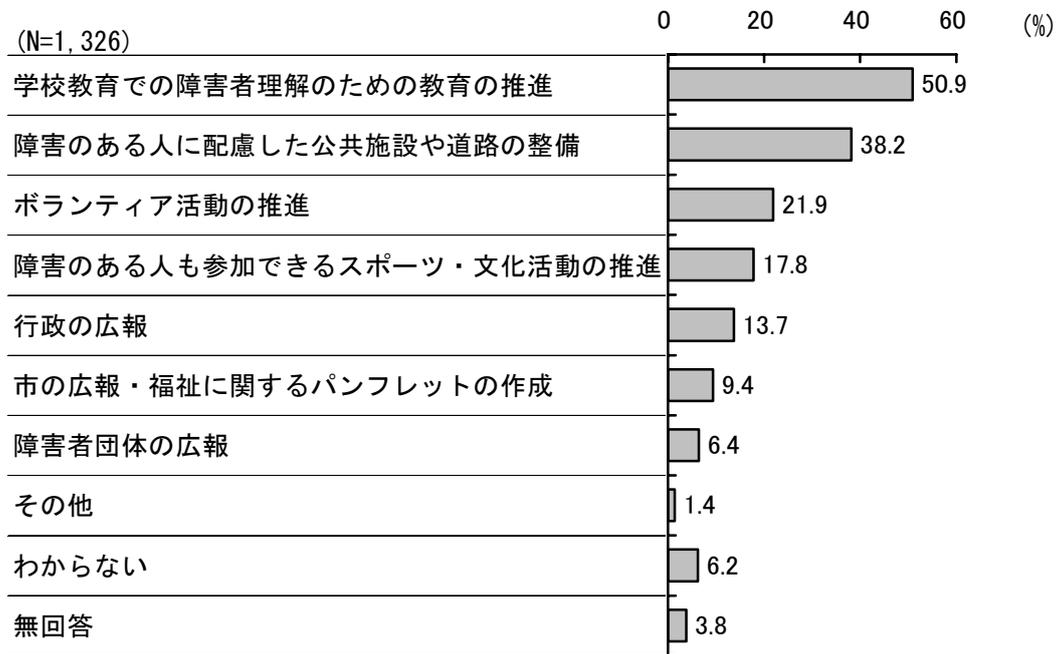
年代別にみると、「抵抗なくできた」は20代、40代で低く、「少し不安はあったが難しくはなかった」や「少し難しかったがなんとかできた」は20代、40代で高い。「あまり手を出せなかった」は年代が上がるほど割合が低くなる傾向となっている。



経験のない理由を性別にみると、大差は見られないが、「どのようにしてよいか、わからないから」は女性が男性をわずかに上回っている。

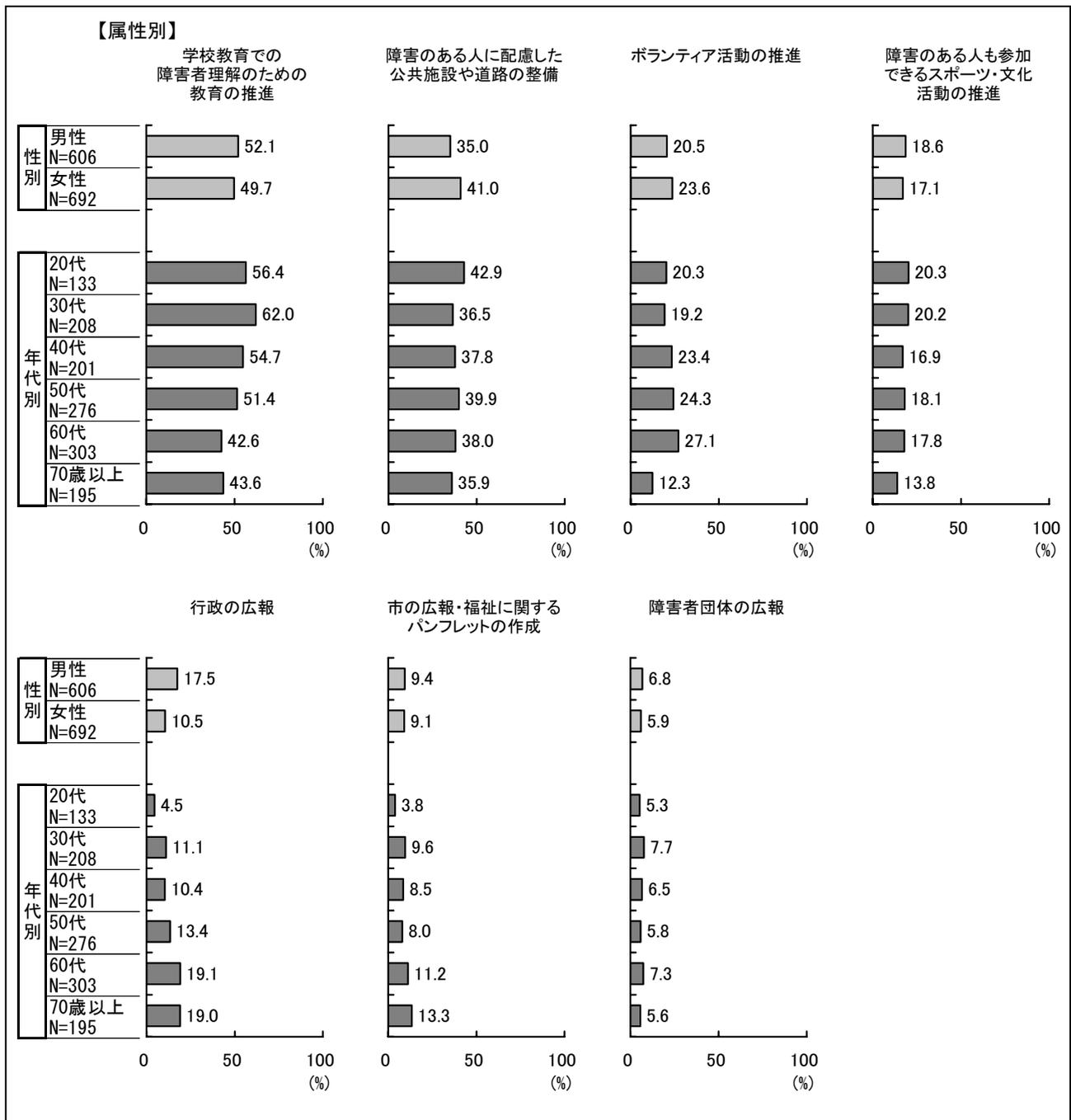
年代別にみると、「専門の人や関係者に任せた方がよいと思うから」は年代が上がるほど割合も高くなっている。「興味がないから」は20代で7.7%と他の年代に比べて目立って高くなっている。

問 20 障害のある人に対する理解を、より深めるために必要なことは何だと思えますか。(〇は主なもの2つまで)



障害のある人に対する理解を深めるために必要と思うことは、「学校教育での障害者理解のための教育の推進」が過半数に達して最も高い。

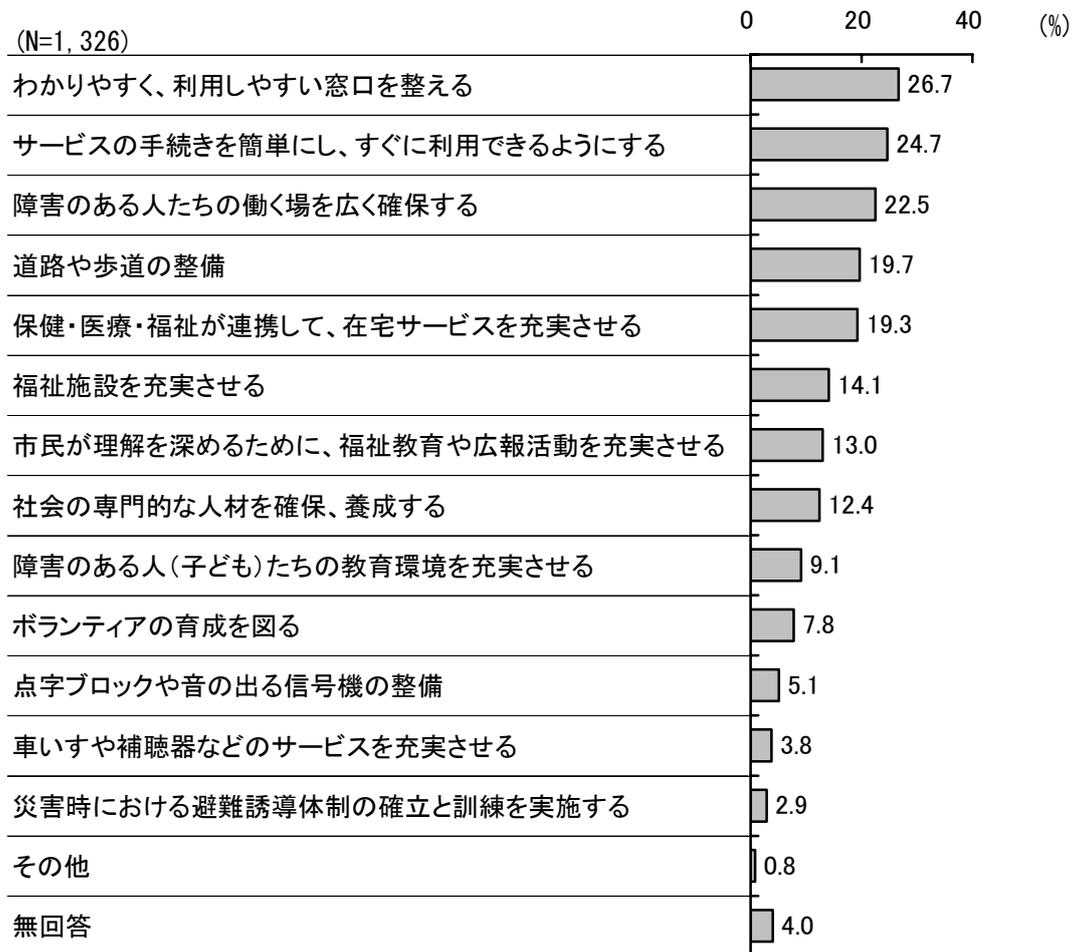
障害のある人に対する理解を深めるために必要と思うことは、「学校教育での障害者理解のための教育の推進」が 50.9%と過半数に達して最も高く、次いで「障害のある人に配慮した公共施設や道路の整備」が 38.2%、「ボランティア活動の推進」が 21.9%、「障害のある人も参加できるスポーツ・文化活動の推進」が 17.8%となっている。



性別にみると、「障害のある人に配慮した公共施設や道路の整備」は女性が男性をやや上回り、「行政の広報」は男性が女性をやや上回っている。

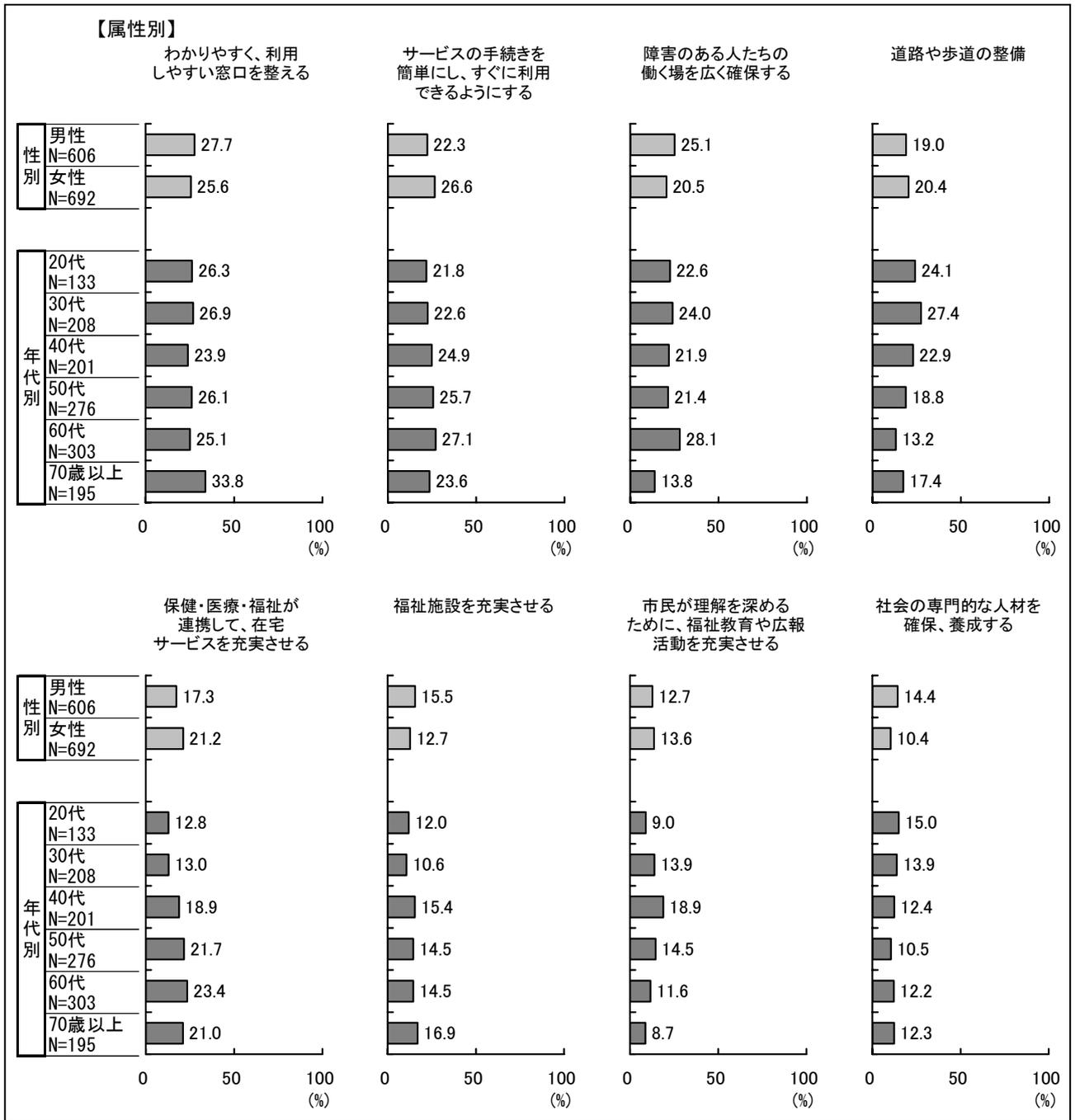
年代別にみると、「ボランティア活動の推進」は70歳以上で低くなっており、「行政の広報」、「市の広報・福祉に関するパンフレットの作成」は逆に20代で低くなっている。

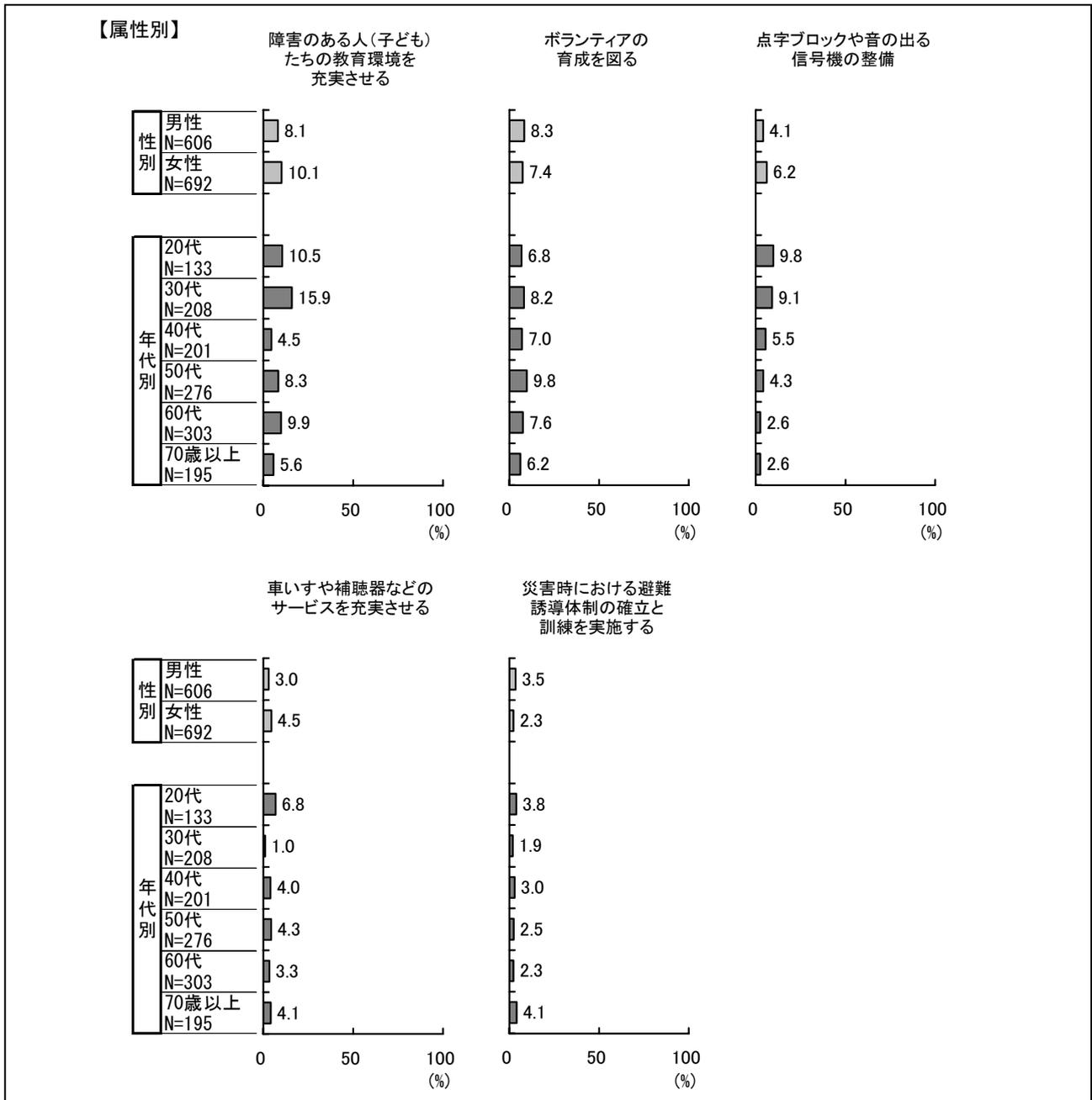
問 21 障害のある人にとって住みやすいまちをつくるためにどのような活動が重要だと思いますか。  
(○は主なもの2つまで)



障害のある人に住みやすいまちをつくるために重要と思われる活動は、窓口の整備や手続きの簡便化、職場の確保など。

障害のある人に住みやすいまちをつくるために重要と思われる活動は、「分かりやすく、利用しやすい窓口を整える」が26.7%と最も高く、以下「サービスの手続きを簡単にし、すぐに利用できるようにする」(24.7%)、「障害のある人たちの働く場を広く確保する」(22.5%)、「道路や歩道の整備」(19.7%)、「保健・医療・福祉が連携して、在宅サービスを充実させる」(19.3%)までが2割前後となっている。





性別にみると、大差は見られない。

年代別にみると、「道路や歩道の整備」は年代が低いほど割合が高い傾向がみられる。「保健・医療・福祉が連携して、在宅サービスを充実させる」は年代が上がるほど割合も高くなる傾向となっている。「市民が理解を深めるために、福祉教育や広報活動を充実させる」は40代で2割近くとなっており、「障害のある人（子ども）達の教育環境を充実させる」は30代で目立って高くなっている。